

27	田原	田原市立東部中学校	マキノ ユウキ 牧野 湧生
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

文章を批判的に読むことで、作品の価値に気づくことができる生徒の育成  
 - 3年「故郷」の実践を通して -

### 1 はじめに

本学級の生徒は、1学期に取り組んだ論説文「人工知能との未来／人間と人工知能と創造性」において、作品を批評する学習を行った。生徒は、複数の文章を比較したり、読み取った内容を自分の経験や知識と比べたりすることを通して、筆者の意見に納得できるかどうか、批評文を書くことができた。しかし、文章を読み深めていないために、書かれていないことをもとに批評文を書いてしまう生徒がいた。また、批評の観点が曖昧になってしまい、作品の価値に気づくことができない生徒も見られた。そこで、批評する力をより深めるためには、文章を読み深めることで、文章に表れている作者の考え方を捉える力を身につけることが必要であると考えた。また、批評の観点を明確にして文章を批判的に読むことで、作品の価値に気づくことができる力を身につけることも必要であると考え、本研究主題を設定した。

### 2 研究のねらい

本研究では、物語文「故郷」を扱う。主人公である「私」の思い出の中の故郷と現在の故郷を対照的に表現することで、時代背景や社会に生きる人々の厳しい状況を浮かび上がらせている。また、登場人物の過去から現在に向かう変容の様子が明確に描写されているため、置かれた立場や身分の違いによって生じる、登場人物の関係や心情の変化を読み取りやすい。

情景描写や行動描写、構成や展開を読み取ることで、文章に表れている作者の考え方を捉えることができる点、また、文章を批判的に読むことで作品の価値に気づくことができる点に、この教材の価値がある。そこで、目指す生徒像を次のように設定した。

- 叙述に着目して読み深めることで、文章に表れている作者の考え方を捉えることができる生徒
- 文章を批判的に読むことで、作品の価値に気づくことができる生徒

### 3 研究の仮説と手立て

前述した生徒像に迫るために、以下の2つの仮説と4つの手だてを設定した。

#### 仮説1

現在の場面と回想の場面を比べ、登場人物や故郷の様子の変化を読み取ることができる学習活動の工夫をすれば、文章に表れている作者の考え方を捉えることができるだろう。

手だて1 登場人物や故郷の様子の変化を読み取りやすくするために、「対比」をキーワードとして読み進める。

本教材には、現在と回想の登場人物の様子、冒頭と結末の情景描写など、対比されている場面が数多くある。そこで、現在の場面と回想の場面を比べ、登場人物や故郷の様子の変化を対比させる。また、情景描写には情景を表すだけでなく、登場人物の心情を表す効果があることを押さえる。登場人物や故郷の様子の変比に着目させることで、主人公である「私」の考え方を読み

取る。このように、「対比」をキーワードとして読み進めていくことで、文章に表れている作者の考え方を捉えることができるようにする。

手だて2 二つの訳を提示し、比較して読むことで、表現の違いによる印象の違いを捉える。

「私」の気持ちを読み取る際に、竹内好氏と藤井省三氏の二つの訳を提示する。二つの訳を比較し、叙述の違いに着目することで、その違いから生じる読み手が受け取る印象の違いを考える。訳者による作品の印象の変化を押さえることで、一つの訳だけでは得ることができない作品に対する理解、つまり、作者が伝えたいことへの理解を深められるようにする。

## 仮説2

観点を明確にして批評文を書くことで、作品の価値に気づくことができるだろう。

手だて3 批評する観点を伝え、「批評文の書き方」を提示する。

導入の段階で、「故郷」という作品の価値（魅力）について、自分の考えをまとめ、批評文を書くという学習の見通しをもつ。そして、批評文を書く際には、「人物の生き方や描かれ方」「語り手の思いや考え方」「時代や社会背景」「構成や展開」「表現の効果や語句の使い方」という批評する観点を伝え、「批評文の書き方」を提示する。さらに、「批評文の書き方」に沿った構成メモを用意することで、書くことが苦手な生徒も取り組めるようにする。

手だて4 タブレットを活用し、生徒の意見を共有する。

批評文を交流する際、タブレットの classroom を活用することで、他の生徒の意見を、発表よりも簡単に、短い時間で見られるようにする。多くの批評文を見ることができると、より多くの他者の意見と自分の意見を比較することができる。一人では気づくことができなかった意見に触れ、新しい作品の価値に気づくことができるようにする。

## 4 抽出見の設定

抽出見として生徒Aを設定し、学習の様子やワークシートの記述から変容を追うことで、手だての有効性を検証していく。

1学期に取り組んだ、論説文「人工知能との未来／人間と人工知能と創造性」の学習において、読み取った内容を自分の経験や知識と比べ、筆者の意見に納得できるかどうか、批評文を書くことができた。しかし、批評の観点が曖昧になってしまい、作品の価値に気づくことができなかった。そこで、文章を読み深めることで、文章に表れている作者の考え方を捉える力を身につけてほしい。また、批評の観点を明確にして文章を批判的に読むことで、作品の価値に気づくことができる力を身につけてほしいと考えた。

## 5 単元構想（8時間完了）

	学習活動	教師の支援	評価
出 会 う	○「故郷」を通読し、作品の設定を捉えよう。(①②)	○物語の理解を深めることができるように、作品が描かれた時代の中国の荒廃した状況や魯迅の人物像について、概要を押さえる。	○作品に興味をもち、設定を捉えることができたか。
深 め る	○情景描写や行動描写に着目し、故郷の様子や登場人物の変化を読み取ろう。(③④) ○「私」が感じた「悲しむべき厚い壁」とは何か、考えよう。(⑤) ○「私」が抱く「希望」とは何か、考えよう。(⑥)	○故郷の変化は社会情勢の変化によって起こり、登場人物の生活にまで影響を与えていると気づくことができるように、時代背景にも目を向け、変化した理由を考えるように伝える。 ○表現の工夫と作者の考え方に関わりがあると気づくことができるように、二つの訳を提示し、比較する活動を設定する。	○叙述に着目することで、文章に表れている作者の考え方を捉えることができたか。
ま と め る	○「故郷」の価値を伝える批評文を書き、交流しよう。(⑦⑧)	○書き始められない生徒には、書き出し方や例文を提示するなど、段階を踏んでヒントを提示する。	○文章を批判的に読み、「故郷」の価値について、自分の考えをまとめることができたか。

## 6 研究の考察と実際

### (1) 「対比」をキーワードとして、登場人物や故郷の様子の変化を読み取る生徒A (仮説1-手だて1)

第1時では、本文を通読し、感想を書いた。生徒Aのワークシートには、「昔はルントウと仲が良かったのに、現在は気まずい感じになってしまって、悲しい気持ちになった。」と書いてあった【資料1】。表面的な内容しか読み取ることができず、当時の中国の時代背景にまで目を向けることができていないと分かる。

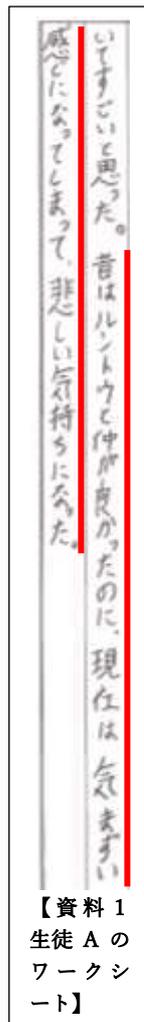
そこで、第2時では、物語の理解を深めることができるように、作品が描かれた時代の中国の荒廃した状況や、作者の魯迅がどのような人物であるか、概要を押さえた。具体的には、「民主共和政治が誕生したにもかかわらず、高い税金によって、農民は貧困に苦しんでいたこと」「作者である魯迅は、中国の貧困や現状を甘んじて受け入れる民衆の無知を描き、当時の人々に国民性の改革を訴え続けてきたこと」を押さえた。このような概要を押さえることによって、作品を読み深めるための情報を手に入れることができた。

第3・4時では、このような概要を押さえた上で、「対比」をキーワードとして、登場人物や故郷の様子の変化を読み取り、変化した理由を考える学習を行った。生徒Aは、現在と回想の場面の「ルントウ」「ヤンおばさん」「故郷」の様子が対比されている場面を探し出し、教科書に線を引くことができた【資料2】。また、その理由として「登場人物が『私』との身分の差を感じたから。」とノートに書いた。生徒Aの振り返りには、「作者が現在と回想の対比をととても意識しているので、何かそこに伝えたいことがつまっているのではないかと思った。」と書いてあった【資料3】。「対比」をキーワードとして読み進めていくことで、本文の叙述には、作者の考え方が表れているのではないかと気づくことができたと分かる。

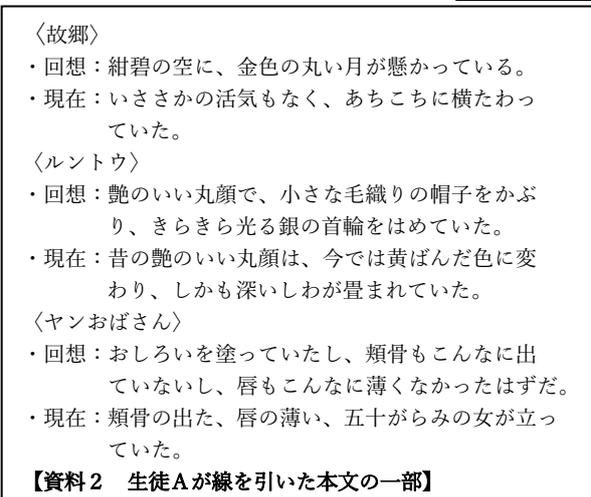
### (2) 二つの訳を比較することで、文章に表れている作者の考え方を捉える生徒A

#### (仮説1-手だて2)

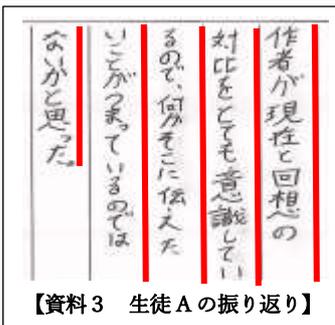
第5時では、「叙述には、作者の考え方が表れているのではないか」という生徒Aの気づきを明確なものにするため、「悲しむべき厚い壁」という叙述に焦点を当てて、作者の考えを読み取る学習を行った。その際、竹内好氏と藤井省三氏の二つの訳を提示した【4頁 資料4】。叙述の違いに着目することで、一つの訳だけでは得ることができない作品に対する理解、つまり、作者が伝えたいことへの理解を深める場面を設定した。最初、生徒Aは「悲しむべき厚い壁」を「二人の間にある貧富の差による心の壁」とワークシートに書いた【4頁 資料5】。その後、訳の違いを比較し、受け



【資料1 生徒Aのワークシート】



【資料2 生徒Aが線を引いた本文の一部】



【資料3 生徒Aの振り返り】

る印象の違いを活動班で交流した。生徒Aは、「悲しむべき厚い壁」とは何かもう一度考え、ワークシートに「私が勝手に作った、時間や身分による壁」と書いた【資料5】。「私が勝手に作った」「時間によってできた」という二つの要素を読み取り、追加した。二つの訳を比較し、叙述の違いに着目することで、一つの訳だけでは得ることができない作者が伝えたいことへの理解を深めたことが分かる。

また、どちらの訳が、物語の内容をより伝えられる表現になっているか話し合った。生徒Aは、「僕は竹内好さんの方が適していると思いました。なぜなら、今できた壁という表現の方が、昔は裕福であったが今は貧しいというルントウの変化を表すことに適していると感じるからです。」「中国の時代背景を表すためにも、「今壁ができた」というように、現在の貧困を強調した方がいいと思います。」と発言した【資料6】。最初は「二人の間にある貧富の差による心の壁」という読み取りしかできていなかった生徒Aであったが、二つの訳を比較することで、叙述に着目して読みを深めることができた。つまり、叙述に着目することで作者の考え方を捉えることができると明確に気づくことができた。

(3) 作者がこの作品を通して伝えなかった「希望」に迫る生徒A  
(仮説1-手だて1)

前時の振り返りで、「ここまで読み進めた上で疑問に感じる点」を生徒に書かせたところ、多くの生徒が「最後の場面の『希望』とは何か疑問に感じる」と書いた。生徒Aも「なぜ希望を道に例えているのか疑問に思った。」と振り返りに書いた【資料7】。

〈竹内好さんの訳〉

私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口が聞けなかった。

〈藤井省三さんの訳〉

僕は身震いしたのではないかと。僕にもわかった、二人のあいだはすでに悲しい厚い壁で隔られているのだ。僕も言葉が出てこなかった。

【資料4 提示した二つの訳】

資料5 生徒Aのワークシート

〈どちらの訳が、物語の内容をより伝えられる表現になっているか〉

T：二つの訳を比較して、どちらの訳が物語の内容をより伝えられる表現になっていましたか。

生徒B：藤井省三さんの訳がいいと考えました。なぜなら、身分の差は昔からあり、二人がそれに気づいていないだけだからです。それを表現するためには、「すでに」という訳がいいと思いました。

生徒A：僕は竹内好さんの方が適していると思いました。なぜなら、今できた壁という表現の方が、昔は裕福であったが今は貧しいというルントウの変化を表すことに適していると感じるからです。

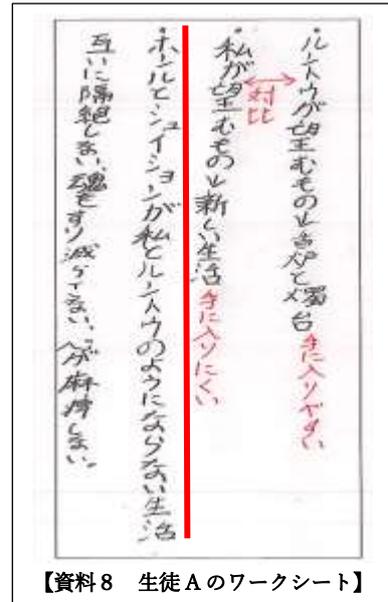
生徒C：僕は藤井省三さんの方がいいと思いました。昔からの身分の差が大人になってから自然と出てしまうという中国への作者の指摘が、より読み取れると感じるからです。

生徒A：それなら、民主共和政治が誕生したのに、貧しいという中国の時代背景を表すためにも、「今壁ができた」というように、現在の貧困を強調した方がいいと思います。

【資料6 話し合いの様子】

資料7 生徒Aの振り返り

そこで、第6時では、叙述に着目して読み取る力を深めるために、『私』が抱く『希望』とは何か』を読み取る学習を行った。その際、「対比」をキーワードとして学習を進めた。まず、「私とルントウ」と「ホンルとシュイション」の関係性の対比を行った。対比を通して生徒たちは、「昔の私とルントウの関係（仲がよい）は、今のホンルとシュイションと同じである。」という点に気づくことができた。また、「私の望むもの（新しい生活）」と「ルントウの望むもの（香炉と燭台）」を対比し、私の望むものは手に入りやすく、ルントウの望むものは手に入りやすいという点に気づくことができた。それを踏まえた上で、『私』が抱く『希望』とは何か』考えた。生徒Aはワークシートに「ホンルとシュイションが私とルントウのようにならない生活」と書いた【資料8】。また、ペアでの話し合いでは、生徒Dに対して、「当時の中国の状況



【資料8 生徒Aのワークシート】

を変えるような内容だ  
と思う。」  
「ホンルと  
シュイシ  
ョンが私と  
ルントウのよ

＜「私」が抱く「希望」とは何か＞

T：対比を押さえた上で、「私」が抱く「希望」とは何か考え、隣同士で話し合ってください。

生徒D：「私」の望むものは手に入りやすいってことだね。

生徒A：うん。だから、当時の中国の状況を変えるような内容だと思う。

生徒D：身分の差をなくすとか、貧富の差をなくすとかかな。「新しい生活」って教科書にあるから、この生活を皆が送るようになることじゃないかな。

生徒A：「新しい生活」っていうのは、ホンルとシュイションが私とルントウのようにならない生活をする事だと思う。「彼らは新しい生活をもたなくてはならない」って教科書に書いてあるし。

【資料9 話し合いの様子】

うのようにならない生活をする事だと思う。」と発言した【資料9】。対比をキーワードとして読み進めたからこそ、叙述を根拠として、作者の考え方を捉えることができた。

（4）批評を通して、作品の価値に迫る生徒A（仮説2－手だて3・4）

第7・8時では、作者の考え方に気づき始めている生徒が、作品の価値にまで考えを深めることができるように、批評文を書く活動を設定した。

まず、第7時では「批評文の書き方」を提示した【資料10】。さらに、「批評文の書き方」に沿った構成メモを用意した。批評文の書き方を提示し、構成メモを用意することで、書く活動が苦手な生徒も取り組むことができた。

（1）批評する観点を決める。

- ・人物の生き方や描かれ方
- ・語り手の思いや考え方
- ・時代や社会背景
- ・構成や展開
- ・表現の効果や語句の用い方

（2）「この作品の価値は ～ にあると思う。」と作品の価値を書く。

（3）そのように考えた理由を書く。

（4）作品から感じたメッセージを書く。

（5）「私が考えたこと（まとめ）」を書く。

【資料10 批評文の書き方】

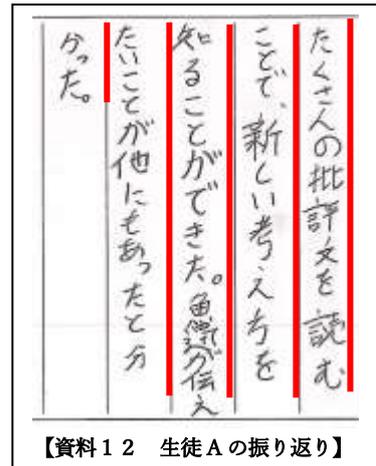
この作品の価値は、作者である魯迅の考えの伝え方にあると思う。魯迅はこの作品で中国国民の精神を変えたかった。しかし、この作品でそれを直接的に訴えかけているわけではない。教科書の本文に「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」とある。この文には、「身分や貧富の差をなくすという希望をもつ人が増えることで、その希望は実現する」という意味がある。直接的に言うてはいなくても、魯迅の伝えたいことが伝わってくる。

自分が伝えたいことを伝える方法は一つではない。今の時代は、インターネットなどで自分の意見を伝えるということが容易にできる。だからこそ、国の政治や社会への関心を高め、自分の意見を持ち、伝えるという行動を起こすことが大切なのではないだろうか。

魯迅は直接意見を伝えないことによって、読み手の受け取り方の多様性を生み出している。だからこそ、時代背景や生きる環境が違う人が読んでも、魯迅の考えが伝わるのではないだろうか。この作品の価値はここにある。

【資料11 生徒Aの批評文】

第8時では、構成メモをもとにタブレット上のワークシートに批評文を入力した。生徒Aは、「語り手の思いや考え方」を観点に設定し、批評文を入力した。「読み手の『希望』の捉え方に多様性があるからこそ、『故郷』という作品には普遍性がある」という作品の価値を読み取ることができた【5頁 資料11】。その後、タブレットの classroom を活用し、批評文の交流を行った。交流をした後の生徒Aの振り返りには、「たくさんの批評文を読むことで、新しい考え方が入ってきた。魯迅が伝えたいことが他にもあったと分かった。」と書いてあった【資料12】。タブレットを活用したことで、一人では気づくことができなかった意見に触れ、新しい作品の価値に気づくことができた。



## 7 研究の成果と今後の課題

手だて1 登場人物や故郷の様子の変化を読み取りやすくするために、「対比」をキーワードとして読み進める。

「対比」をキーワードとして読み進めることで、叙述に着目することができた。そのため、読み取りが飛躍することなく、学習を進めることができた。叙述を根拠として、作者の考え方を読み取るという点では有効であったと考える。

手だて2 二つの訳を提示し、比較して読むことで、表現の違いによる印象の違いを捉える。

二つの訳を提示したことで、叙述の違いに着目することができた。また、一つの訳だけでは得ることができない作品に対する理解、つまり、作者が伝えたいことへの理解を深めることができた。叙述に着目することで、作者の考え方を捉えることができると気づくという点では有効であったと考える。

手だて3 批評する観点を伝え、「批評文の書き方」を提示する。

批評する観点を伝え、「批評文の書き方」を提示したことで、書くことが苦手な生徒も批評文に取り組むことができた。五つの観点を示し、書き方を伝えたことは有効であったと考える。しかし、書くことが得意な生徒については、考えを狭めてしまう可能性があると感じた。批評文を書く上で、どのような観点到に気づかせたいのか、どのような批評文を書かせたいのか、より吟味しておく必要があったと感じた。

手だて4 タブレットを活用し、生徒の意見を共有する。

タブレットの classroom を活用することで、生徒は短時間に多くの批評文を読むことができた。そのため、一人では気づくことができなかった意見に触れ、作品の新しい価値に気づくことができるといふ点では有効であったと感じる。しかし、タブレット上でのやりとりのみに留まってしまったため、なぜその観点到にしたのか、どのようなところにこの作品の価値があるのかなど、直接話し合うことができなかった。話し合いを通して気づくこともある。そのため、タブレット上で記入したとしても、話し合い活動を設定する必要があった。

以上の結果から、批評を通して作品の価値に気づくためには、書き方の提示方法や批評文の交流方法をより工夫する必要があると分かった。今後も、教材がもつ価値を読み取ることができる生徒が増えるような授業を求め、研究を重ねていく。